全面緊急事態：

全面緊急事態は、原子力施設において公衆に放射線による影響をもたらす可能性が高い事象が生じたため、確定的影響を回避し、確率的影響のリスクを低減する観点から、迅速な防護措置を実施する必要がある段階である。

この段階では、原子力事業者は、全面緊急事態に該当する事象の発生及び施設の状況について直ちに国及び地方公共団体に通報しなければならない。国は、全面緊急事態の発生の確認を行い、遅滞なく、地方公共団体、公衆等に対する情報提供を行わなければならない。国及び地方公共団体は、ＰＡＺ内において、基本的にすべての住民等を対象に避難や安定ヨウ素剤の服用等の予防的防護措置を講じなければならない。また、事態の規模、時間的な推移に応じて、ＵＰＺ（③②ⅰ㈡で述べるＵＰＺをいう。以下同じ。）内においても、ＰＡＺ内と同様、避難等の予防的防護措置を講じる必要がある。

㈡　具体的な基準

これらの緊急事態区分に該当する状況であるか否かを原子力事業者が判断するための基準として、原子力施設における深層防護を構成する各層設備の状態、放射性物質の閉じ込め機能の状態、外的事象の発生等の原子力施設の状態等に基づき緊急時活動レベル（Emergency Action Level。以下「ＥＡＬ」という。）を設定する。ＥＡＬは、各原子力施設に固有の特性に応じて設定される必要があり、ＥＡＬの設定に係る詳細な検討を今後行うが、当面、緊急事態区分を判断する基準として、従前より原災法等に基づき運用している施設の状態等を適用する。実用発電用原子炉の具体的な緊急事態区分と当面のＥＡＬの内容は、表2のとおりである。

㈢　今後の検討等

今後、原子力規制委員会は、原子力事業者に対して実用発電用原子炉の標準的なＥＡＬの設定及びその提出を求め、標準的なＥＡＬに基づき、表2を改定する。原子力事業者は、表2の緊急事態区分に従い、各実用発電用原子炉の特性及び立地地域の状況に応じたＥＡＬの更なる詳細設定を検討し、その結果を原子力事業者防災業務計画に反映して原子力規制委員会に届け出なければならない。原子力規制委員会は、必要に応じて原子力事業者防災業務計画の作成又は修正を命ずることができる。

また、ＥＡＬを設定するに当たって、原子力事業者は、以下の事項を考慮しなければならない。

・ＥＡＬは、原子炉施設における異常の兆候、発生した事象又は放射性物質の閉じ込めの状態に基づいて設定する。なお、異常の兆候に基づくＥＡＬは、炉心温度、冷却材水位、格納容器圧力等の測定可能な指標に関連するものである。発生した事象に基づくＥＡＬは、安全設備のポンプや安全弁の故障、複数の設備への電源の喪失など潜在的な安全上の重要性を有する事象である。放射性物質の閉じ込めの状態に基づくＥＡＬは、燃料被覆管、原子炉冷却材圧力バウンダリ、格納容器等の主要な閉じ込め機能の健全性に関わるものである。

・ＥＡＬは、原則として、炉心の損傷や放射性物質の環境への放出の開始前に防護措置を講じることができるよう、これらのおそれが生じる原子炉施設の状態を想定して設定する。

なお、実用発電用原子炉以外の緊急事態区分及びＥＡＬについては、今後、原子力規制委員会において検討し、本指針に記載する。

ⅱ　運用上の介入レベル（ＯＩＬ）

㈠　基本的な考え方

全面緊急事態に至った場合には、住民等への被ばくの影響を回避する観点から、基本的には上記ⅰの施設の状況に基づく判断により、避難等の予防的防護措置を講じることが極めて重要であるが、放射性物質の放出後は、その拡散により比較的広い範囲において空間放射線量率等の高い地点が発生する可能性がある。このような事態に備え、国及び地方公共団体は、緊急時モニタリングを迅速に行い、その測定結果を防護措置を実施すべき基準に照らして、必要な措置の判断を行い、これを実施することが必要となる。こうした対応の流れについては、図1及び表1の後段にまとめる。

放射性物質の放出後、高い空間放射線量率が計測された地域においては、被ばくの影響をできる限り低減する観点から、数時間から一日以内に住民等について避難等の緊急防護措置を講じなければならない。また、それと比較して低い空間放射線量率が計測された地域においても、無用な被ばくを回避する観点から、一週間以内に一時移転等の早期防護措置を講じなければならない。これらの措置を講じる場合には、避難場所等でのスクリーニングの結果から除染等の措置を講じるようにしなければならない。さらに、経口摂取等による内部被ばくを回避する観点から、一時移転等を講じる地域では、地域生産物の摂取を制限しなければならない。また、飲食物中の放射性核種濃度の測定を開始すべき範囲を数日以内に空間放射線量率に基づいて特定するとともに、当該範囲において飲食物中の放射性核種濃度の測定を開始し、その濃度に応じて飲食物摂取制限を継続的に講じなければならない。

㈡　具体的な基準と防護措置の内容

これらの防護措置の実施を判断する基準として、空間放射線量率や環境試料中の放射性物質の濃度等の原則計測可能な値で表される運用上の介入レベル（Operational Intervention Level。以下「ＯＩＬ」という。）を設定する。防護措置を実施する国及び地方公共団体においては、緊急時モニタリングの結果をＯＩＬに照らして、防護措置の実施範囲を定めるなどの具体的手順をあらかじめ検討し決めておく必要がある。

各種防護措置に対応するＯＩＬの初期設定値として設定した内容を、表3にまとめる。同表の値は、東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故の際に実施された防護措置の状況や教訓を踏まえて、実効的な防護措置を実施する判断基準として適当か否かなどという観点から当面運用できるものとして設定したものである。

㈢　今後の検討等

本来、ＩＡＥＡでは、まず緊急時に住民等を最適に防護するための基準（包括的判断基準）を定め、そこからＯＩＬを導出することとしている。このため、我が国としても、今後、ＩＡＥＡからＯＩＬの導出に係る情報が公表され、我が国におけるＯＩＬの検討に必要となる環境が整った際には、前記の導出の考え方を考慮して包括的判断基準からＯＩＬを算出し、今回設定したＯＩＬの見直しを検討する。また、ＯＩＬの初期設定値は、緊急事態の特性が初期設定値の条件と異なる場合は変更することが望ましい。ＯＩＬの初期設定値の変更の在り方や、放射線以外の人体への影響も踏まえた総合的な判断に基づくＯＩＬの設定についても検討する。さらに、今後、ＩＡＥＡ等の国際機関による防護措置の体系の検討状況も踏まえ、必要に応じて本指針の改定を行う。